

英作文における英文法と語句使用の誤りに関する一分析 — *Power-Up English <Pre-Intermediate>* を実例にして—

Error Analysis in English Composition:
Referring to *Power-Up English <Pre-Intermediate>*

神 野 雅 代
Masayo KANNO

<要旨>

学生の英作文の質を改善できない原因の一つに文法知識の適用が十分に機能していないことを鑑み、習得が困難である文法項目について検証した。まず、授業実施前にテキストにおいて部分英作文の Exercise をさせてから文法指導を行い、授業実施後、その復習テストを行った。そこで修正できていなかった文法項目を分析して指導法を示し、文法力を改善するためのリメディアル的な補完が具体的にどのようなものであるかを提示した。自身で誤りを修正できなかった項目を把握することで、今後の英文法指導の向上に役立てたい。

キーワード：英文法、語彙、英作文、指導

1. はじめに

授業時間と教育内容の削減されたゆとり教育によって、近年、大学入学時に基礎学力が不足している学生が増えた。本学でも、大学での教育に備えた再教育（リメディアル）が行われている。このような学生に「簡単な日常会話の英語が使えるように指導するとすれば、中学校で習得すべき文法を再教育する必要がある」（成田 2013：150）。習得すべき文法に関しては、「外国語の学習の基本がその言語の語彙と統語規則の習得にあることは間違いありません」とも述べられている（濱田 2016：2）。加藤（2010）の報告によると、英文法の授業を1年間、毎週実施し、さらに発音の指導と訓練を行うことで、1年生のときに TOEIC で 406 点だった学生が、2年生で 558 点、3年生終了時に 619 点（TOEIC-IP 全国平均で 435 点）に伸びており、330 点から 755 点になった学生もいるとのことである。さらに、2004 年度入学生 154 人中、350 点以上点数が上がった学生が 8 人おり、平均すると 150 点伸びたと報告している。英文法の力がライティング力に与える影響について、佐藤（2011：87）は、21 名の大学 1 年生を英文法習熟度によって上位群と下位群にレベル分けをして調査したが、「文法力が低い下位群の学生の英語の質を改善することが困難であることが明らかになった」と述べている。そこで、本稿では、ライティングの前段階である部分英作文における学生の誤りを分析して、指導法を示しながらどのような点に学生がつまづいているのかについて考察し、文法力を高めるためのリメディアル的な補完が具体的にどのようなものであるかを提示した。

田辺（2011）も学生の英語力を高める手段としての文法指導には、ある程度体系化されたものが不可欠であると述べている。それが、日常的に繰り返し指導する内容であるためには全ての英文に関わる文法事項でなくてはならないとし、「主語、動詞に相当する語句の理解と文中の品詞の区別を日常的に指導すること」を提案している。そこで、分析の方法として田辺（2011）の提案に従って、動詞の使用とそのほかの品詞の使用における学生の間違いに着目して考察した。まず、授業実施前にテキストにおいて部分英作文の Exercise を行ってから文法指導を行い、授業実施後にその復習テストを行った。そこで修正できていなかった文法項目について、まず、動詞は現在形と過去形、未来を表す表現、進行形、完了形に関して、そのほかの品詞は形容詞、副詞、名詞、代名詞、前置詞に関して取り上げて誤用の解釈と指導例を加えた。なお、対象学生のレベルは英検 3 級から準 2 級程度で、クラスサイズは 15 名であった。

2. テキストについて

テキストは、*Power-Up English <Pre-Intermediate>*（以下、PE と略す）である。幅広い習熟レベルの学習者が対象とされており、初級から中級への橋渡しとなるように作成されている。

2.1. PE のコンセプト

PE では各 Unit ごとにトピックが定められており、全 24 ユニットにおいて、多彩なトピックが扱われている。そのため言語面だけでなく、学習者の興味・関心を踏まえて授業計画を立てられる。各 Unit は Listening、Reading、Grammar のセクションで構成されており、この 3 つのセクションは 1 つのトピックで関連付けられている。¹⁾

Sports を題材にした Unit 19 を例に挙げると、競技人口を表す大きな数の表現（million、the largest player population）などが有用表現として繰り返し使われている。Listening Section においては、Listening Tips で数量表現が取り上げられており、フルマラソンの 42.195 という数字や試合のスコアの読み方などが扱われている。Reading Section では、The World's Most Popular Sport? というエッセイが掲載されている。Grammar Section においては、Grammar Points で英語のコミュニケーションに必要な特定の文法項目が各 Unit でそれぞれ説明されており、本 Unit では、比較表現として原級、比較級、最上級の説明が簡潔になされている。それに続く Exercise で Grammar Points で扱われた文法項目や表現形式を学習者に練習させることが意図されており、本 Unit には、比較表現における原級、比較級、最上級（the largest player population など）を使わせる文法練習がある。それは、適当な文を選んだものではなく、スポーツと関連する例文で構成されており、単なる文法の記号操作に終わらず、アウトプット能力の育成につながるように配慮されている。Reading Section のエッセイや Read Aloud（音読練習）のコーナーにおいても the largest player population などの最上級を表す言語表現が使われているので、学習者に対して繰り返し言語形式の詳細に目を向けさせることができる。

2.2. Grammar Section について

Grammar Section は、Grammar Points と 3 題の練習問題で構成されており、高校までに学習し

た英文法項目の主なものを復習することになる。以下に Grammar Points における文法説明の取り入れ方と練習問題の内容や方法についてまとめる。

Grammar Points には基本的な文法項目が用例付きで説明されているので、意識的な文法学習による明示的知識が得られる。Exercise 1 は、空欄に入る適切な語句を選択肢から選んで英文を完成させる問題であり、Grammar Points の理解を確認することができる。Exercise 2 は、日本語に合うように空欄に適切な語句を補充する和文英訳の問題である。選択肢はなく、語彙や英文について自分で考える必要がある。杉浦（2010：131）は、近年発行された英語教育法に関する書籍を調査して和文英訳に対する視点の分析を試み、和文英訳を使った活動を文法形式の学習手段と意味内容の表現手段に分けた。そして、語彙や表現の乏しい初心者に、準備なしで英文を書かせるには困難が伴うので、教室での和文英訳を文法形式（form）を学習させるための手段として位置づけている。Exercise 3 は、語句を並べ替えて英文を完成させる問題であり、英作文能力の基礎となる文法的基盤を固めることを狙っている。

和泉（2016：213）は、「実際に使える言語知識にするためには、形式面だけに注目するのではなく、形式と意味、そして目的・状況・場面などを結び付けて学ぶことが大事になる」と述べている。2.1 節に述べたように、Grammar Section は Listening Section と Reading Section を通して理解したインプットに関連する語句を活用した Exercise で構成されている。つまり、学習者は、関連する語句が使われる場面のもとで特定の文法項目を使うことになるので、文法学習への動機づけが高まるように配慮されていると考える。

3. 間違いの例と検証

以下に、授業前に行った Exercise 1 と Exercise 2 において正答率が 70% 未満の例文を抜粋して提示し、それぞれについて解説を加える。

3.1. 動詞に関わる項目の分析

3.1.1. 動詞に関わる項目の分類

本項では、動詞の使用に関して種類別に抜粋して列挙する。授業実施前後に行ったテストにおける正答率をそれぞれ正答の後の括弧内に示す。なお、(1)～(8)は PE からの引用である。

① 現在形と過去形の使用

- (1) Everyone who meets Tom (fall / falls / fell) in love with him at a first sight. (p.24)
正答 Everyone who meets Tom falls in love with him at a first sight. (43% → 100%)
- (2) She (complains / complained) about her ex-boyfriend every time we met. (p.24)
正答 She complained about her ex-boyfriend every time we met. (50% → 100%)

② 未来を表す表現の使用

- (3) Hurry up, or you (will miss / missed) the last train. (p.28)
正答 Hurry up, or you will miss the last train. (63% → 100%)

- (4) I (will take / was going to take) the flight tomorrow, but it has been canceled. (p.28)

正答 I was going to take the flight tomorrow, but it has been canceled. (47% → 93%)

③ 進行形の使用

- (5) At this time next year, Janet (will work / will be working) in Hawaii. (p.32)

正答 At this time next year, Janet will be working in Hawaii. (53% → 100%)

- (6) He (owns / is owning) five Italian restaurants in Tokyo. (p.32)

正答 He owns five Italian restaurants in Tokyo. (33% → 87%)

④ 完了形の使用

- (7) If I read the book one more time, I (have / will have / had) read it four times. (p.36)

正答 If I read the book one more time, I will have read it four times. (53% → 87%)

- (8) By the end of 2010, sales of his novel () () him thirty million yen.

(2010 年末までに、小説の売り上げは彼に 3,000 万円をもたらせていた) (p.36)

正答 By the end of 2010, sales of his novel had brought him thirty million yen.
(47% → 60%)

3. 1. 2. 間違いの解釈と指導例

以下に前項の①～④における間違いの解釈と指導例について述べる。

① 現在形と過去形の使用における間違いの解釈と指導例

(1)において、fall は「…になる」という状態変化を表す動詞として用いられている。授業実施前に行ったテストで fall と fell を選んだ学生がそれぞれ 4 名ずついたが、授業実施後の復習テストでは全員が修正できていた。fall によって示される状態の時間が現在なのか、それとも過去なのかということが問われているが、関係詞節の動詞 meet が現在形であるので、本動詞 fall も現在形に揃えて解答することになる。

(2)については、授業実施前に行ったテストで 7 名の学生が complains を選んだが、授業実施後のテストでは全員修正できていた。(2)の every time は江川 (2008 : 386) によると (9) のように接続詞的に使われる。

- (9) **Every time** a dump truck passes, this house shakes.

(ダンプカーが通る度に、この家は揺れるのです) (太字体は原典) (江川 2008 : 386)

(2)の every time we met における動詞 met は過去時制であり、complains を選んだ学生は every time (毎回～するたびに) という語句に影響されて現在形を選んだ可能性があるが、「過去時制は、話し手が話している瞬間よりも以前に生じたり、存在したりした事柄を表すのに用いられる」(安井 2007 : 274)。そのため、(2)の本動詞 complain も過去形に揃えて解答することになる。

② 未来を表す表現の使用における間違いの解釈と指導例

(3)は、Hurry up に接続詞 or と you will … が続くことによって「急げば、間に合うでしょう」という意味になるので、それを定型表現として覚えていけば正解できる問題である。

(10) Stop running, **or** you'll lose your breath.

(走るのはやめなさい、さもないと息が切れますよ) (太字体は原典) (江川：378)

(10)も(3)と同様に命令語句の表現に接続詞 or と you will … が続いている例文である。「命令語句＋接続詞」の表現形式は、PEのUnit 18におけるReading Passageに(11)が見られた。

(11) Take a ride in a hot-air balloon and you will be enchanted with the extraordinary beauty of the scenery. (p.78)

(11)において、授業でTake a ride in a hot-air balloonに接続詞 and と you will … が続くことによって「熱気球に乗れば、…になるでしょう」という意味になることを確認した。このように、実際にテキストのReading Passageで使用されている文章においても対応する文法項目を示されることで、理解がより強固なものになるようであった。

(4)は、未来表現の中で使用頻度が高いと思われる will と be going to に関する問題である。be going to と will との比較については、江川(2008：220)において「近接未来と単純未来」と「意志未来」に分けて説明されており、(4)の正答文は「意志未来」に相当している。つまり、前もって考えていた意図、または計画であり、日本語の「～するつもりだ」に相当する。「明日飛行機に乗る計画をしていたが、運行がキャンセルされた」という意味である。will はその場の状況に応じた意図を表し、be going to とは異なるため、この場合に be going to でなく、will を使うと、運行がキャンセルされたという状況に応じていないことになるので不適切な文になる。

(12) a. Don't sit on that rock. It **will** fall.

b. Don't sit on that rock. It's **going to** fall. (太字体は原典) (友繁 2016：28)

(12)は「近接未来と単純未来」の例である。友繁(2016：28-29)によると、(12a)の will は、客観的な予測を行うときに使用される。そのため、予測が可能となるための根拠や理由が必要であるとしている (will の「条件性」)。これに対し、(12b)は、岩が落下するという事態が起きるところで、それが避けられないような場面で用いられると述べられている (be going to の「不可避性」)。

③ 進行形の使用における間違いの解釈と指導例

(5)は、「will + 動詞の原形」または、「will + be + V-ing」のどちらかを選ぶ問題である。正

答文は「来年の今ごろジャネットはハワイで仕事をしていることだろう」という意味であるので、「未来における進行状況」を表している。

(13) a. **I'll drive** into London next week.

b. **I'll be driving** into London next week. (太字体は原典) (友繁 2016 : 44-45)

(13a)には will drive が、(13b)には will be driving が現れている。友繁 (2016 : 45) によると、(13a)の will は決心を表し、(13b)の「will + be + V-ing」の型は、「ことの成り行き」を表す。つまり、「来週ロンドンまで行くことになっている」という意味であり、その状況はことの成り行きによってもたらされることを示していると述べられている。そして、「来週ロンドンまで行くことになっている」と述べた後に「ついだに乗せてあげましょうか」という表現をスムーズに続けられ、「will + be + V-ing」の形式によって、丁寧さや如才のなさを表現することができると説明されている。

(6)は、英語の状態を表す動詞は通常、進行形にしないで用いるということを確認する問題である。(6)の動詞 own を辞書で引くと「所有する」と記載されており、現在進行形で答えた学生の頭の中には「所有している」という日本語があるために、「～(し)ている」という表現に引きずられて be-ing という形式を使用してしまったと思われる。

第2言語習得では、学習者が犯す誤りを発達上の誤り (developmental error) と母語干渉による誤り (interference error) の2つに大きく分類している。前者を言語内の誤り (intralingual errors)、後者を言語間の誤り (interlingual errors) と呼ぶこともある (和泉 2016 : 93)。(6)の誤りは、母語干渉によるものであるといえる。萩野 (2016 : 20) も進行形の指導における留意点として、日本語の「干渉」に注意することと進行形の基本的な特性や機能について習熟させることを挙げている。そして、一般的には「状態を表す動詞」は進行形をとらないと理解しておいて差し支えないと述べている。

④ 完了形の使用における間違いの解釈と指導例

(7)は主節の動詞について現在完了形、未来完了形、過去完了形のいずれかを選ばせる問題である。主節と従属節があり、また時間の概念が複雑になるということも、正答である未来完了形を選ぶことができなかった原因の1つであると考えられる。

(8)は、空所に had brought を入れて動詞 bring の過去完了形を答えさせる問題である。授業実施後に行った復習テストの誤答には、has brought という現在完了形にした事例や is brought という受動態を使用したものがあつた。また、動詞として bring を用いるように指導したにもかかわらず、been を使って had been という過去完了形で表現した解答や have been という現在完了形にしたケースがあつた。

萩野 (2016 : 26) は、「英語の完了形はよくわからない」という主な原因として、「日本語に引きずられてしまうこと」と「時間の概念が分かりづらいこと」を挙げている。そして、「日本語に引きずられ」ないようにするには、「言い表したい中身」に力点を置いて考えるということ

が重要であると述べている。また、「時間の概念が分かりづらいこと」に対しては、まず、「現在完了形」の持つ時間的な概念を理解させ、その後その理解を応用・発展させて、「過去完了形」や「未来完了形」につなげていけばよいとしている。

- (14) When I got to the port, the boat *had* already *left*.

(港についてみると船は出航してしまっていた) (斜字体は原典) (溝越 2016 : 48)

- (15) Before we get to the station, the train *will have* already *left*.

(駅に着く前に列車は出てしまっているだろう) (斜字体は原典) (溝越 2016 : 49)

(14)は過去完了形で描写されており、(15)には未来完了形が用いられているが、溝越 (2016 : 49) は、(15)について、(14)の「過去完了形を時間的に未来に移行した関係といえるだろう」と述べている。

3.2. 動詞以外の品詞に関わる項目の分析

3.2.1. 動詞以外の品詞に関わる項目の分類

本項では、動詞以外の品詞として形容詞、副詞、名詞、代名詞、前置詞を取り上げる。授業実施前後に行ったテストにおける正答率をそれぞれ正答の後の括弧内に示す。なお、(16)～(21)はPEからの引用である。

⑤ 形容詞・副詞の使用

- (16) He looked (happy / happily) to be transferred to headquarters. (p.60)

正答 He looked happy to be transferred to headquarters. (67% → 100%)

- (17) () all the branches in the city had problems due to the blackout.

(停電のために、その都市のほとんどすべての支店に問題が生じた) (p.60)

正答 Almost all the branches in the city had problems due to the blackout. (60% → 87%)

⑥ 名詞・代名詞の使用

- (18) The () are searching every showcase in the museum for evidence.

(警察は証拠のためにその博物館のあらゆる陳列用ケースを調べている) (p.64)

正答 The police are searching every showcase in the museum for evidence. (54% → 85%)

- (19) Most tickets in this shop are cheaper than () sold at the theater box office.

(この店のほとんどのチケットは劇場のチケット売り場のものよりも安い) (p.64)

正答 Most tickets in this shop are cheaper than those sold at the theater box office.

(0% → 85%)

⑦ 前置詞の使用

(20) He will arrive (at / in / on) Kansai International Airport at 10 a.m. (p.68)

正答 He will arrive at Kansai International Airport at 10 a.m. (53% → 87%)

(21) You have to apply for the cultural exchange program () Friday.

(文化交流プログラムに金曜日までに申し込まなければならない) (p.68)

正答 You have to apply for the cultural exchange program by Friday. (47% → 93%)

3. 2. 2. 間違いの解釈と指導例

以下に前項の⑤～⑦における間違いの解釈と指導例について述べる。

⑤ 形容詞・副詞の使用における間違いの解釈と指導例

(16)は、動詞 look の直後に形容詞、または副詞のどちらが来るのかを問うている。副詞の happily を選んだ学生は、例えば、He lived happily ever after. などの文を思い出して、動詞の後にくる要素として happily を選んだ可能性がある。動詞にはいろいろな文型をとるものがあるが、そのとりえる文型は決まっている。安藤 (2011 : 29) は、5 文型における SVC 型の文型について、「この文型は、be 及びその類語から成る**連結動詞** (linking verb) のとるもので、主語の性質・状態を表す主語補語 (subject complement, C) を必要とする (太字体は原典)」と述べている。そして、「連結動詞には、be 型 (補語の現状を示す) と become 型 (補語の結果状態を示す) が認められ、look は be 型である。主語補語になるものは、名詞句、形容詞句、またはその相当語句である」と説明している。²⁾

(17)は、all の直前に適切な語を書き入れる問題である。「ほとんど」という意味には almost 以外に most もあるのでその違いが分かりにくかったと思われる。まず、almost は副詞で、most は形容詞であるということを授業で説明した。つまり、両者の違いは、名詞を修飾できるかどうかにあるが、例えば、形容詞の most は名詞を修飾するので、most branches で「ほとんどの支店」となる。一方、almost は副詞なので、almost branches とはならないが、同様の言い方であっても almost all the branches とは言える。つまり、almost が all という形容詞を修飾しているからである。

(22) He **almost** missed his footing on the stairs.

(階段であぶなく足を踏み外すところだった) (太字体は原典) (江川 2008 : 137)

さらに、(22)において動詞 missed を修飾している例として almost を提示し、副詞は動詞や形容詞を修飾すると覚えておくようにと指導した。それにもかかわらず、授業実施後のテストで空所に most と記載している解答があった。

⑥ 名詞・代名詞の使用における間違いの解釈と指導例

(18)は集合名詞の police を空所に書き入れる問題である。江川 (2008 : 3) によると、集合

名詞には(23a)のように集合体を1単位として見る用法と、(23b)のようにその構成要素である個体を主として見る用法との2つがある。そして、集合名詞の **the public** と **the police** について、「両者とも複数形がないが、前者は単数扱いが多く、後者は複数扱いになる」と述べている。

- (23) a. There was a large audience in the theater.
(劇場は大入りだった) (江川 2008 : 3)
- b. The audience were growing restless.
(聴衆はそわそわし始めた) (Loc. cit.)

以上のように例文も提示して指導したが、授業実施後のテストで **polices** と記載しているケースがあった。動詞に **are** が使われているので主語名詞 **police** を普通名詞のように扱って複数形を表す接辞 **-s** をつけたのではないかと考える。

(19)は **than** の直後に指示代名詞の **those** を書き入れる問題である。授業実施前に正答した学生がいなかったのも、まず、授業で語彙や文構造が理解できているかどうかを確認した。江川(2008 : 56)によると、指示代名詞の **this/these** と **that/those** には、代名詞用法と形容詞用法と副詞用法がある。

- (24) Hawaiian *discos* are different from **those** (=discos) in Japan.
(ハワイのディスコは日本の[ディスコ]と違います) (斜字体と太字体は原典)
(江川 2008 : 56)

(24)の **those** は、(19)の正答における **those** と同様に代名詞用法で、名詞の繰り返しを避けている。(19)について授業で、(24)の括弧内に示されているように、代用された元の名詞も提示して説明したが、授業後のテストで不定代名詞である **one** と記載している誤答があった。

⑦ 前置詞の使用における間違いの解釈と指導例

(20)は、動詞 **arrive** の直後にくる前置詞を **at**, **in**, **on** の中から答える問題であるが、授業実施前後の両方のテストにて **on** を選んだ学生はいなかった。そこで、場所を表す前置詞の **at** と **in** について以下のように指導した。

- (25) a. Meg arrived **at** New York on February 10th.
b. Meg arrived **in** New York on February 10th. (太字体は原典) (友繁 2016 : 140)

(25)は、「2月10日にメグがニューヨークに到着した」ことを述べているが、友繁(2016 : 141)によると、(25a)は、「話し手がニューヨークを点的な存在としてとらえている」のに対し、(25b)は、「話し手がニューヨークを三次元的に広がった空間としてとらえている」。そして、「New York のように空間的に広がりのある都市について述べる場合は、(25b)に見られるように通常

in が用いられる」が、話し手が「New York を地図上の一点、例えば、飛行機の乗り換え地点として捉えている場合には(25a)に見られるように at が使用される」と述べられている。つまり、at または、in の前置詞のいずれかが選択されるのは、対象物が存在する場所を話し手がどのように捉えているかによるとしている。

(21)は、「金曜日までに」という日本語に対応させるために前置詞 **by** を空所に書き入れるだけなのだが、授業実施後のテストにおいて修正できずに **until** と記載しているケースもあった。**by** は、動作・状態がある時点までに終了することを表す場合に用いられ、**until** は、動作・状態がある時点まで継続することを表す場合に用いられる（友繁 2016：184-85）。

(26) a. Meg will not come here **by** eight o'clock.

b. Meg will not come here **until** eight o'clock. （太字体は原典） （友繁 2016：185）

(26a)においては、メグが来るのは8時以降のある時である。そして、(26b)では、「メグが来ない」状態は8時まで継続し、8時ちょうどに来ることが通常、暗示されるという。

4. おわりに

本稿では、授業実施前後にテスト形式で行った部分英作文を分析して、授業実施前に正答率が70%未満であった文法項目の中で授業実施後も間違いを修正できていなかった項目について間違いの解釈と指導例を提示した。動詞の現在形と過去形の使用における間違いは、修正した限りにおいて授業実施後、全員が理解できていた。未来を表す表現については、「近接未来と単純未来」と「意志未来」との違いに起因する間違いを修正できていないケースがあり、過去時制で用いられる **be going to** の指導が十分にされるべきであることが判明した。動詞の進行形に関しては、状態動詞において母語干渉による誤りが授業実施後にも散見した。動詞の完了形については、過去完了形を使うべきときに現在完了形を使用してしまうというように、時間の概念に関する問題も残存していた。また、完了形に「助動詞 **have** + 動詞の過去分詞形」でなく、「**be** 動詞 + 動詞の過去分詞形」という受身形を記載している事例もあったので、過去完了の意味とそれを表すために必要な文法形式とを関連させて練習することが求められる。

動詞以外の品詞では、授業実施後も副詞の **almost** と形容詞の **most** を間違えているケースがあり、語の意味や綴りが似ているために混乱が生じていたと思われる。名詞と代名詞の使い方においては、複数形の無い集合名詞は単数扱いのものと複数扱いのものがあるので、さらなる練習をして定着させる必要があることもテスト結果から判明した。また、**than** の直後に複数名詞の代用表現を記入させる比較級の問題は、授業実施前に正答者がいなかったもので構文そのものの解説が求められる。前置詞については授業実施後においても **at** と **in** や、**by** と **until** の意味の違いを習得できていないケースがあった。

PE の Grammar Section の例文は、文ごと記憶すればコミュニケーションに役に立つ「活きた」表現である。Exercise を行う中でその Unit のトピックに関連する有用な英語表現が培われる。このような表現を使いこなせるようになれば、英語による表現が容易になってくるとと思われる。

今後は、本稿で分析した文法項目における具体的な定着の差を常に認識しながらリメディアル的な補完を行う所存である。なぜ誤りとなるのかを理解することが容易でない項目についても、文法だけを遊離させずに、文脈に根ざした言語指導を行うことによって形式・意味・機能の関係性を理解させ、繰り返し練習をして定着させることをめざしたい。

注

- 1) *Power-Up English <Pre-Intermediate>* の概要、および、本文で触れる Listening Section と Reading Section の構成については神野（2016）を参照。
- 2) 安藤（2011：31-32）には主語補語になるものとして、名詞句と形容詞句以外に、前置詞句が形容詞的に働いて、主語補語になっている例が掲載されている。

引用・参考文献

- 安藤貞夫（2011）.『英語の文型—文型がわかれば、英語がわかる—』（開拓社 言語・文化選書5）東京：開拓社.
- 江川泰一郎（2008）.『英文法解説』改訂三版. 東京：金子書房.
- 萩野俊哉（2008）.『ライティングのための英文法』東京：大修館.
- 濱田英人（2016）.『認知と言語—日本語の世界・英語の世界—』（開拓社 言語・文化選書62）東京：開拓社.
- 和泉伸一（2016）.『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』（アルク選書シリーズ）東京：アルク社.
- JACET リスニング研究会（2015）. *Power-Up English <Pre-Intermediate>*. 東京：南雲堂.
- 加藤映子（2010）. シンポジウム「英語運用力の底上げ—リメディアルと ESP が鍵—」第12回英語教育総合研究会資料. 大阪. 2010-12-12.
- 神野雅代（2016）. 大学の英語教育における音声指導— *Power-Up English <Pre-Intermediate>* を実例にして—『教育研究実践論集』創刊号, 261-65.
- 溝越彰（2016）.『時間と言語を考える—「時制」とはなにか—』（開拓社 言語・文化選書61）東京：開拓社.
- 成田一（2013）.『日本人に相応しい英語教育』東京：松柏社.
- Odlin, T. (1998). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: CUP.
- 佐藤桐子（2006）. 大学生の英文法力とライティング力の相関性『熊本学園大学 文学・言語学論集』18 (1), 73-92.
- 杉浦正好（2010）. ライティング指導としての和文英訳『愛知学院大学文学部紀要』39, 127-35.
- 田辺英一郎（2011）. 高専の英語教育と文法指導『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』45, 33-37.
- 田中茂範、武田修一、川出才紀（2006）.『Eゲイト英和辞典』携帯版. 東京：ベネッセコーポレーション.
- 友繁義典（2016）.『英語の意味を極めるⅡ—動詞・前置詞編—』（一歩進める英語学習・研究ボックス）東京：開拓社.
- 安井稔（2007）.『英文法総覧』改訂版. 東京：開拓社.

